

保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第6報 - 主にピアノ初心者の指導法について⁽⁴⁾

白石景一・中村浩美

The Study of Music Teaching Method at Training School for Child-Care Works Report 6.
mainly about the way to teaching of beginner-4

Keiichi SHIRAIISHI・Hiromi NAKAMURA

キーワード：ピアノ初心者・保育者養成・音楽指導法・コード伴奏法

1. はじめに

平成17年度、長崎女子短期大学紀要に「保育者養成校における音楽指導法研究 - 第1報 - 」とし、本学幼児教育学科専門科目「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の指導法についてとりあげ、その現状と評価、指導上の要点、今後の研究の方向性などについて報告した。

平成18年度はこの継続研究 - 第2報 - として「ピアノ初心者などの指導法」を主に取り上げ、本学幼児教育学科のピアノ初心者や音楽が不得手な学生に対する「指導実践の内容」や「新たな試み」などについて幼児教育学科専門科目「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「幼児音楽指導法」の指導法を中心に報告した。

平成19年度は、「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第3報 - として第2報に引き続きサブテーマ「主にピアノ初心者の指導法について⁽²⁾」として平成18年度から「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「幼児音楽指導法」において新たに実施した指導法などの評価や課題とその対応・改善の報告と、「音楽基礎ゼミナール」「2オクターブスケールと易しいカデンツ」「マーチアルバム」「カリキュラムの改訂」「ソナチネアルバムに替わる教材」「幼児音楽指導法(保育内容)・音楽Ⅰ・音楽Ⅱの連携」などについて報告した。

平成20年度は、「保育者養成校における音楽指

導法の研究 - 第4報 - 」として、これまでの評価・改善などに対するの検証と「音楽Ⅱ」における「音楽遊び」の指導内容・方法についても報告した。

平成21年度は、「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第5報 - 」サブテーマ「主にピアノ初心者の指導法について⁽³⁾」として平成17年度からの継続的授業評価と改善への検証について報告した。また、かねてからの課題であったピアノ初心者への「和音コード利用による簡易伴奏法の指導」についての新たな試みについても報告した。

本年度(平成23年度)は、「コード伴奏法」のカリキュラムを取り入れて3年目に当たる。また、「音楽Ⅰ」の科目名が平成23年度から「子どもの歌と伴奏法」と保育への関わりが分かりやすい科目名に改定された。授業内容は、以前から幼児とのかかわりにおける子どもの歌の伴奏や弾き歌いの指導を主に行っている。今回は「子どもの歌と伴奏法」としての初年度でもあるので、コード伴奏法の教育効果や課題などについて検証も含め、1年間の振り返りを報告する。

2. 昨年度実施指導法の評価と課題への対応・改善

全ての教育活動に於いて、計画し試みる 評価する 課題を見つける 対応・改善を検討し実行する。この繰り返しを常に行われてしかるべきで

ある。17年度紀要から授業改善の報告を継続しており今年度（23年度）も前年度からの試みやこれまでの取り組みに対しての評価と課題、これに対する対応・改善について以下に報告する。

2.1 子どもの歌と伴奏法（旧音楽Ⅰ）・音楽Ⅱ レッスン記録について

平成18年度より実施し5年目になり定着したと言えよう。以下に〔課題・問題点〕〔対応・改善〕を番号対応形式で報告する。

〔課題・問題点〕

①どの程度評価の対象にするか。また回収方法や集約について

②学生の記録内容の統一性については「幼児音楽」「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」において指導した。

〔対応・改善〕

①記録用紙は「子どもの歌と伴奏法（旧音楽Ⅰ）」に関しては、前・後期それぞれの終了時に担当者がチェックして学生に返却する。2年生の音楽Ⅱ指導教官は1年時のレッスン記録を提出させて1年時のレッスン内容を把握し学生へ返却する。レッスン記録については各指導教官の裁量で評価に反映することは可能である。

②他の指導者が見ても同じように対象の学生の学習履歴が理解できるようにするためには、さらに具体的な記入方法を検討し、初回の授業時にプリントを配布するなどして説明する方法がよいのではないと思われる。また、授業の1～3回の間各担当者が気がけて指導する必要がある。

2.2 音楽基礎能力テストの実施

平成18年度新入生より実施した。テストの内容は、読譜の基礎中の基礎的なもので、ト音記号・ヘ音記号や拍子・リズムの理解度と階名の理解度などが主であった。

実施の結果、音楽的基礎知識について特に読譜の基礎知識は全くの初心者が多くいることが分かった。また、読譜の知識が備わっている学生とそうでない学生との差が思っていたより大きいことも分かった。しかし、ある程度知識があると評

価された学生の中にも実際のピアノ演奏技能習得においては音楽的能力が低い学生も見つけられたことから、19年度からは18年度実施の基礎能力テストに加え実際読譜能力の診断にウエイトを置き、ごく簡単でポピュラーな「子どもの歌」のメロディーの音譜を読んでメロディーがどの程度想像できるかについてもテストした。このテストの結果と「子どもの歌と伴奏法」の授業での各担当指導者による初心者選出により「基礎ゼミナール」受講対象者を選出した。

〔課題・問題点〕

やはり、ペーパーテストより、「子どもの歌と伴奏法」担当者が直接学生の習熟度を判断した方が的確である。

〔対応・改善〕

基礎能力テストの結果よりも「子どもの歌と伴奏法」の授業での判断のほうがより妥当ではないかと考えられるので、後者にウエイトを移していった。

2.3 5指のみで演奏可能な短い子どものうた曲 や6音で演奏可能な短い曲の弾き歌い基

昨年度（平成18年度）より実施しているが本年度（21年度）は、20年度よりさらに曲数を増やし「おかたづけ」「メリーさんのひつじ」「ぶんぶんぶん」「ちょうちょう」「ロンドンばし」「かっこう」「むすんでひらいて」「おててをあらいましょう」「あくしゅでこんにちは」「ごあいさつ」以上10曲を取り上げ、初心者には「右手のメロディーとうた（階名・拍子・歌詞など）」、「左手伴奏とうた」「両手伴奏とうた」などのステップを念頭に指導を行った。初心者にとっての「弾き歌い」の導入として効果は少なからずあったと思われる、今後も継続したい。具体的〔課題・問題点〕は19・20年度長崎女子短期大学紀要にも報告している。

〔課題と改善〕

20年度より「幼児音楽指導法」の授業において簡易伴奏を提供してきたが、21年度より調性についても考慮して楽譜を提供した。これは5指のみで移動なく演奏可能な子供の歌は、F Dur が非常

に多いため C Dur・G Dur・F Dur・D Dur・B Dur の各調に移調し、本年度も実施した。これは「簡易伴奏法」や「コード伴奏法」の基礎練習としても有効である。

実施時期については、できるだけ早期（4月）に行うよう心掛けたい。

3. 幼児教育学科専門教育科目「子どもの歌と伴奏法」平成23年度まとめ

今年度（平成23年度）は昨年度よりさらに初心者、もしくは自称経験者と言っても初心者レベルの学生が多く、昨年度の「音楽担当者会議」で予定していた試験内容と時期に遅れが生じ、課題の進捗状況に焦りが見られる影響が出てしまった。

具体的な内容として、6月下旬に行った第1回目の試験では「5指のみの弾き歌い」を行った。曲は「ちょうちょう」「おかたづけ」「ぶんぶんぶん」「かっこう」「メリーさんのひつじ」であり、この時期にエチュードの試験を行なわなかったのはバイエルの初歩者が多く、評価しにくいことがあったためである。また、試験の曲数も昨年度より減らし確実に仕上げられることを目的に進度レベルを落とした。片手ずつ弾くことも大変な学生が両手で伴奏しながら、しかも歌まで一緒に演奏することはとても難しいことであり、かなりの努力が要するわけでもある。ただ、5指のみで指変えがないことで弾きやすく、歌にも集中しやすい選曲をした。伴奏法においては各教員が正確な音とリズムについてなど丁寧に指導を行い、歌唱法においては「幼児音楽指導法」の授業とリンクさせて、発声・体の使い方（腹筋、背筋、腰筋）・口の開け方・口角や表情筋の使い方・歌詞読みなどの歌うことの基礎を指導している。

「弾き歌い」は人前で歌うことへの羞恥心を取り除き、表情良くテンポ感を持ち、歌詞も明瞭に子どもが歌いやすいように先導しなければならない。例えば、前奏からイメージを持ち子どもが歌う準備ができるようタイミング良く「さんはい」と声をかけることはとても大切であり、その難しさも入学した間もない学生達は当初四苦八苦していたようだ。ネックはやはりピアノ伴奏がスムー

ズに弾けないことである。スムーズに弾けないことで曲のイメージも持てないまま、歌うことに大いに影響してしまうのが問題である。また、子どもの曲に多く出てくる \square \square や \square \square のリズムの区別が難しいようで、手拍子でリズムたたきをしたり、リズムに言葉を入れて練習することを指導しているが、習得するには大変である。2回目以降の試験は以下の通りである。

* 2回目7月中旬 エチュード

* 3回目10月中旬 「5指 + α （指変え）の弾き歌い」「むすんでひらいて」「ロンドン橋がおちる」「ごあいさつ」「おててをあらいましょう」「あくしゅでこんにちは」

* 4回目11月下旬 エチュード

* 5回目1月下旬 実習に必要な「生活の弾き歌い」「おはようのうた（コード奏法）」「おはようのうた（Dur）」「おはようのうた（Cdur）」「おべんとう」「はをみがきましょう」「おかえりのうた」「さよならのうた」

これらの試験を行うことで、保育者を目指す学生は子どもが大好きな歌を正しく楽しく歌えるための場が必要であることを自覚し、保育者になるための目標を常に持って意識改革をしてほしいと望んでいる。しかし、長い夏休みや冬休みはどうしてもその目標意識が薄れ、練習不足が目立つことは問題である。また、「弾き歌い」の課題と並行してバイエル・ブルグミュラー・ギロック・ソナチネなどのエチュードが追いついていかず、進み具合が遅くなっていることも問題点である。各教員がレベルの差がかなりある学生を90分授業で一人10分～15分しかレッスンできないことがかなり厳しい現状である。授業以外に休み時間を利用して補習レッスンすることも多くなっているという実態もある。

来年度も初心者が多いと予想されるが、今年度のように初心者が多いと言うことで進度を考慮した上で試験の時期を遅くしたり、曲数を減らすのは後期に入ってしわ寄せがくると思われるため、じっくり考えて決めていきたい。

学生に関しては、努力して「エチュード」を進められ「弾き歌い」も上達してきている学生と、

実習で演奏するのに心配な学生との格差が大変大きい。自覚意識を持って日々の努力の積み重ねが必要であることを今後とも指導していきたい。

<コード授業>

コード奏法は楽譜（特に左手伴奏）通りに奏法するのが難しく、歌までも伴うことが困難な学生に簡単な伴奏で演奏でき、「弾き歌い」に繋がれることがねらいで3年前よりその授業を取り入れている。一年生の「子どもの歌と伴奏法」の90分の授業の中で、ピアノレッスンを45分コード奏法を45分として前半と後半に分かれて交互に受講する形をとっている。

コードにはC・D・E・F・Gのような長三度+短三度のメジャーコードや、短三度+長三度の構成でできているCm・Dm・Em・Fmのようなマイナーコード、またセブンスと言われる属7が入るコードなどたくさんあるが、そのコードの根音、つまりCならドの音・Fならファの音を弾けるようなところから始めている。そして徐々に段階を経て三和音を弾けるように習得し、伴奏形態も簡単なバリエーションを指導し応用していくようにしている。しかしここで問題なのは、根音を理解し弾けるようになるにはコード表示（C・D・E・F・G・A・Bなど）を覚えれば意外と早く弾けるようになるのだが、三和音を一度に弾くことや、そのコードを展開形にするのが難しいようで慣れるのに時間がかかることである。

1、授業内容

メロディーのみ書いてある譜面に対して、自分なりの伴奏を付けて演奏してみる。これは就職先の現場で即興的に演奏できることを目標としている。

2、課題

「弾き歌い」のテストとリンクさせた曲や、子どももよく知っている好きな曲を使用。例えば「手をたたきましょう」「むすんでひらいて」「おべんとう」「めだかのがっこう」「かたつむり」「とんぼのめがね」「どんぐりころころ」「もりのくまさん」「アイアイ」「おおきなたいこ」「あわてんぼうのサンタクロース」「おしょうがつ」「ちょう

ちょう」「チューリップ」「メリーさんのひつじ」「ぞうさん」「ミッキーマウスマーチ」「ゆうきりんりん」「さんぽ」など約30曲～40曲

3、学生の授業の反応

差はあるが良く練習してきてコードについての興味を持っている学生が多い

4、授業の評価

初心者の学生はメロディーを弾くのも精一杯で、正確な音やリズムを習得するのに時間がかかる。しかしそれぞれのレベルにあったコード伴奏で対応した。

5、コード授業のメリット

譜面に追い回されない演奏ができる。このことで即興演奏（伴奏）の興味を持てるようになってきた。

6、授業しやすい環境であるか

授業が141教室で音楽の授業をする教室ではないため、毎授業の度に配線などのセッティングが大変である。課題はテキストを制作してプリント配布しているため冊子作成が今後の課題である。

7、その他

1年生のみの授業では習得が難しく、伴奏の必要を実感する2年生でも継続することが理想である。

4．平成23年度までに実施したり変更したりした指導法について

4.1 音楽基礎ゼミナール

音楽基礎ゼミナール実施についての経緯・位置づけ・方法などについては平成19年度・20年度の報告（保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第3報・第4報 - ）に掲載している。3年間実施した中で受講生の感想として、「音楽知識の無さを痛感しつつ理解できてよかった」「理解できるようになったが音楽Ⅰの授業にそれを生かすのはなかなか難しい」「放課後の時間を都合するのは大変なので授業として取り入れてほしい」「回数を増やして繰り返し指導してほしい」「これをきっかけに遅れを取り戻し頑張りたい」などの感想が聞かれ、指導した側からも基礎ゼミナールを受講した学生全員とは言えないが、理解度が高

まってきたことを実感できた。(19年度報告)

21年度も20年度とほぼ同様に実施したが、出席率が低下したことが一つの懸念材料であった。これは、学生の目的意識の低下や、3年目になり自由参加、強制的ではないボランティア授業が当たり前の感覚になってきたことが大きな原因ではないかと思われる。22・23年度も継続して実施した。やはり一定の効果はあるが、「幼児音楽指導法」「子どもの歌と伴奏法」連携や時間割上にはない補習などで、時間の確保が年々困難になってきていることも大きな問題である。来年度以降も初年度教育の一環として必要であることは間違いないが、同じ形態で実施すべきかどうか再検討の必要がある。

平成23年度基礎ゼミナール(5回)

1回目 6月2日 2回目 6月16日

3回目 6月23日 4回目 7月14日

5回目 7月22日

参加人数 Aクラス 31名 Bクラス35名

授業内容 基礎的な楽典、読譜の基礎等
音符読み、楽譜の説明、音符の名称、拍子と拍、音符・休符の足し算・引き算、リズム叩き

4.2 ピアノ独奏・連弾楽譜およびCD・メトロノームの貸し出しロッカー設置

平成19年度より実施した「楽譜・CD・メトロノームの貸し出し」は学生は大いに利用しており、さらなる充実が求められる。課題として、CDデッキ・メトロノームの故障や楽譜の噴出など管理上の問題や鍵の問題などがある。

4.3 「音楽Ⅱ」へ「ボイストレーニング」の導入

平成22年度「音楽Ⅱ」の後期より前期の音楽遊びと同様にピアノの個人レッスンと45分45分交代でボイストレーニングを導入した。指導者の確保の問題で23年度は後期5～6回の授業となり、来年度に向けての課題となった。

5. 音楽担当者会議について

年に1回程度当年度の総括と次年度へ向けての方針などについて会議を行っている。以下は、平成22年度音楽担当者会議(第5回)の記録である。

会議日時：平成23年3月22日(火)13:00～15:30

場所：音楽あそび室

参加教員：甲斐、中澤、白石、中村、野口、安達、中嶋、村田、三浦、宮崎、内田、鶴川
以上12名 欠席者なし

会議内容について

1. 平成22年度を振り返って(音Ⅰ・音Ⅱ)

* 初心者が益々多くなり、指導時間が足りなく次年度への引継ぎに悩む。

* 通常授業や土曜補講日以外に、昼休みなどを利用してボランティアレッスンをした

2. 教材についての<情報交換・エチュード・連弾>(音Ⅰ・音Ⅱ)

* バイエル終了後の教材はすぐにソナチネに進める学生もいたが、その学生のレベルによってブルグミュラーやギロックを使った。

* バイエル終了後にすぐソナチネは難しいと思われる。

* 入学して初めてのレッスンでバイエルの後半を練習してきたと言う学生でも、そのレベルに達しえおらず前半に戻すとプライドが許さず顔に出る学生がいた。

* 入試で殆どの学生がピアノを経験したことがあると話しているようだが、現状は初心者同様で、それがどれだけ大変なことで努力が必要か、そのことを学生本人に認識させることも大切である。(音楽授業の最初のガイダンスで指導する)

* 2年生最後のテストである連弾は記念ホールで行い良かった。学生がホールで演奏することは良い緊張感を持ちながら演奏を楽しめ、また、クラスメートの演奏にも普段以上に集中して聴く事ができた。来年度も続行。

3. 子どもの歌、弾き歌いについて<指導方法・課題曲・テストの時期など>(音Ⅰ音Ⅱ)

* 先生役と子ども役に分けて演奏させる。先生役の学生には伴奏が止まらないで最後まで弾けるよう、ある意味の危機感を持たせることが大事

である。

- * 課題曲の曲数が多く中途半端になるようにも感じるため、曲数を絞ってリズム感・拍子感など音楽性を育む指導を強化した方が良い。
- * リズム感や拍子感を養うために伴奏をもっと易しくしてみてもどうか。
- * リズム感や拍子感は確かに大切な事とは思いますが、それより曲数をこなして現場で生かせる指導をした方が良いように思う。
- * 幼児教育の音楽とはどんなものかを柱に指導に繋げる必要がある。
- * 保育者養成校としてどんな音楽指導が必要かを考えるべきである。
- * 課題曲についてはもっと検討する余地があり、ただ難しい曲で良ければと言う考えを改め、現場に繋がれる曲を練習させたい。
- * 「弾き歌い」のテストが予定されるとエチュードがなかなか進まない。
- * テストで一人が伴奏、一人が歌うと言う形があっても良いのではないか。
- * 伴奏が難しければ伴奏の音をまびいてみるのはいかがでしょうか。(必要な音のみにする)
- * 伴奏を弾くことがネックで歌えないことをなんとか指導した。

4. 試験の内容・進行の仕方について(音Ⅰ・音Ⅱ)

- * ソナチネ・ソナタは第1楽章～第3楽章まで全部を指示せず、どれか1楽章のみに絞る。
- * バイエルもソナチネ・ソナタ同様、番号を絞る。
- * 曲の途中から指示を与えて演奏させるのではなく、曲の最初から演奏させることにする。

5. 補習レッスンについて

- * 次の授業にくいこんでしまわないように。万が一くいこむことになった場合は、担当教員が次の授業の担当教員にその旨を伝える。(学生に言わせないこと)
- * お昼休みの補習レッスンは、昼食をきちんと取らせアッセンブリに時間厳守で参加させること。

6. 試験の日程と回数について(音Ⅰ・音Ⅱ) < 22年度を参考にした23年度のテスト予定 >

(子どもの歌と伴奏)

- ① 6月 5指のみの弾き歌いテスト。6月下旬か7月初旬に。従来通り6月上旬に行くと、初心者が多いのにエチュードが進まず基本が身につかない。
- ② 7月 弾き歌いとエチュード
- ③ 10月 生活の曲。
- ④ 12月 エチュード
- ⑤ 1月 「ぞうさん」「おつかいありさん」「やぎさんゆうびん」弾き歌い
* コード奏法含む。6月の季節の曲(2年生実習準備)も入れてはどうか。

(音楽Ⅱ)

- ① 5月 6月幼稚園実習に向けての弾き歌い
- ② 7月 8月9月10月保育園・幼稚園実習に向けての弾き歌い
- ③ 11月 就職試験に向けてのエチュード
- ④ 12月 シラバスの子どもの歌「犬のおまわりさん」他
- ⑤ 2月 連弾(まとめの授業・学生の演奏会として)

7. コード奏法の授業について<学生の達成度など>(音Ⅰ)

- * コード奏法授業が初めての試みで、1年間のみの授業のため進行状況に多少難点があった。次年度は考慮しての授業にしたい。
- * ついていけない学生となかなかついてこれない学生とのひらきが出てしまった。
- * 学生が他の授業や時間割の編成上かなり忙しいことがわかった。
- * 「やる気」にさせる授業を目標としていたが、足踏み揃える授業とするのは難しかった。
- * コードの「ベース」と「歌」を確立した授業にしていきたい。

8. オクターブスケールについて(音Ⅰ)

- * 「調」の意識は大切だが、バイエルにも1オクターブで出ているためテストは必要ない。

9. マーチ・ラン・スキップ・ギャロップなど動きに合わせた音楽について(音Ⅱ)

- * 春休みの宿題にしたが、テストはせず各担当教員で指導する。

10. レッスン記録について（音Ⅰ・音Ⅱ）

* 記録の仕方を新年度のガイダンスの折りに指導し、2年生は1年生の時の記録用紙を新担当教員に提出して確認する。

11. 音楽基礎能力テストの実施について<テスト内容・採点など>

* 来年度の「基礎ゼミナール」のためにも、また、年々初心者が増えているので、どのくらい音楽基礎（楽典）を理解しているか確認するためにも実施する。

* 採点は各担当教員が採点し指導する。

12. 音楽基礎ゼミナールについて

* 是非実施した方がよい。

* 学生の時間割も詰まっているため、どのくらい時間を取れるかわからないが、例年通り放課後に時間を作って行う。

13. 幼児音楽指導法の授業との関連について

* 「弾き歌い」のテストや音楽の基礎能力（楽典）を高めるため関連づけた授業は良かった。

* 次年度も関連性を持って授業を進めたい。

14. 音Ⅱの中澤・中村の弾き歌い授業について

* 今年度は二人で日程を変えて行えたが、次年度は中村のみとなる。

* 90分を45分ずつ前半と後半に分けて「弾き歌い」の授業を行うのは時間にゆとりがなく指導が難しかった。

15. 音Ⅱで行うコード奏法授業 *土曜補講日に・・・

* 現場で使えるためにもコード奏法の復習授業を1回でもしたい。

* 予定は5月14日(土)木曜補講・5月21日(土)火曜補講。

16. 成績評価について（音Ⅰ・音Ⅱ）

* 音Ⅰ（次年度・「子どもの歌と伴奏」）コード奏法の成績は参考に、バイエル70番～79番以上に到達している学生には単位を出す目安で。

* 音Ⅱ 前期は中村が各ピアノ担当教員より評価をもらい、その評価に中村が授業を担当している「手遊び歌」「季節・生活の歌」の評価を加える。後期は各ピアノ担当教員が評価を決定する。

17. 貸し出しロッカーについて

* 学生達は良く利用していたが、紛失する楽譜があり管理を徹底する必要がある。

* ショパンのワルツ・マズルカ・ノクターン、「みんなのうた」「こどものうた」などのオーソドックスなCDをたくさん保管して利用させたい。

18. 名称変更のお知らせ

* 23年度～「音楽Ⅰ」「子どもの歌と伴奏法」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅱ」

* 24年度～「音楽Ⅱ」「保育と音楽表現」

6. 幼児音楽指導法（保育内容）・子どもの歌と伴奏法・音楽Ⅱの連携について

平成18年度の3月に第1回目の音楽担当者会議が開催され、毎年開催している。「子どもの歌と伴奏法」「音楽Ⅱ」「幼児音楽指導法」にかかわる担当者がタイアップし学生の意識強化・技能のレベルアップ・実習の準備・就職試験対策などにもつなげるため、今のところ年に1回ではあるが、1年を通しての総括と次年度へ向けてより効果的指導法を模索すべく意見交換する。平成22年度入学生の「音楽Ⅰ」から「コード伴奏法」が導入され、また、「音楽Ⅱ」にも「ボイストレーニング」が導入された。これは、形式的カリキュラム変更は無いが内容的に大きな変革であり、チャレンジである。そのため本年の音楽担当者会議には「ボイストレーニング」「コード伴奏法」の両担当者も出席して、お互いの指導が相乗効果をもたらし、この試みを是非成功させるべく意見交換し、アイデアを出し合った。

7. おわりに

平成17年度長崎女子短期大学紀要第30号掲載の「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第1報 -」に続き昨年度（平成18年度）はその第2報として「主にピアノ初心者の指導法」としての報告。19本年度は「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第3報 -」として18年度に引き続き「主にピアノ初心者の指導法⁽²⁾」として報告。20年度は「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第4報 -」平成21年度「保育者養成校における音楽

指導法の研究 - 第5報 - 」平成23年度「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第6報 - 」と7年間にわたり保育者養成における音楽指導法を一科目に止まらず保育者養成のための音楽教育のくくりで「音楽Ⅰ」(平成23年度より「子どものうたと伴奏法」)「音楽Ⅱ」「幼児音楽指導法」さらに今年度は「和音コード利用による簡易伴奏法の指導」も「計画し試みる 評価する 課題を見つける 対応・改善を検討し実行する」いわゆるPDCAサイクルに加え報告することができた。今回は、特に「音楽あそび」についても実施した結果をもとに報告できればと考えている。

参考文献

- 1) 白石景一、中村浩美、(平成17年度)「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第1報 - 」『長崎女子短期大学紀要第30号』
- 2) 白石景一、中村浩美、(平成18年度)「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第2報 - 」『長崎女子短期大学紀要第31号』
- 3) 白石景一、中村浩美、(平成19年度)「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第3報 - 」『長崎女子短期大学紀要第32号』
- 4) 白石景一、中村浩美、(平成20年度)「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第4報 - 」『長崎女子短期大学紀要第33号』
- 5) 白石景一、中村浩美、(平成21年度)「保育者養成校における音楽指導法の研究 - 第5報 - 」『長崎女子短期大学紀要第34号』